

松野太郎会員が世界気象機関 IMO 賞を受賞

この度、松野太郎会員（元理事長、東京大学名誉教授、北海道大学名誉教授、現所属：海洋研究開発機構）に、世界気象機関（WMO）から「IMO 賞」（International Meteorological Organization Prize；国際気象機関賞）が授与されることが決まりました。これは、去る6月8日から18日にジュネーブ（スイス）で開催されたWMO第62回執行理事会の決定によるものです。

IMO 賞は、WMO における最高の賞であり、気象学、気候学、水文学やそれに関連する分野の進展、並びにそれらの国際的な活動の推進において多大な貢献を成した科学者に対し、原則として毎年1名に贈られます。松野会員の受賞は、1956年の第1回から数えて57人目の受賞となり、日本人では初めてです。

松野会員のこれまでの多大な功績に関して、日本気象学会会員諸氏におかれては既にご存じのことかと思いますが、以下に簡単にご紹介させていただきたいと思っております。

松野会員は、気象学、特に大気力学の分野における研究の発展に大きく寄与し、重要な研究成果を得ておられます。その一つは「赤道波の力学」に関する成果であり、熱帯域の大気や海洋の様々な波動（赤道波）の存在を理論的に示すことに成功しました。ここで示された赤道波は、実際に大気や海洋に存在することが確認されるとともに、例えばエルニーニョ現象の盛衰などにおいて重要な役割を担っていることが後に示されています。もう一つの顕著な研究成果として「成層圏の力学」に関する理論的研究、特に成層圏における突然昇温のメカニズムの解明が挙げられます。

また、松野会員は、気象学とその関連分野における幅広い見識のもとに、気候研究、特に温暖化予測研究の推進において、強いリーダーシップを発揮されました。自ら多くの研究プログラムを主導するとともに、日本における研究拠点の設置とその発展に尽力されました。例えば、東京大学気候システム研究センターのセンター長としての活動、地球フロンティア研究シス

テムの設立と、システム長としての活動が挙げられます。その活動の中でも、地球シミュレーターを用いて実施された温暖化予測のための研究結果は、「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第4次評価報告書」に大きく貢献しました。

更に、近年では、熱帯域の気象を正しくシミュレートすることを目的として、従来の積雲対流パラメタリゼーションを用いず、直接個々の積雲対流を数値予報モデルにおいて計算する「全球雲解像度モデル」を用いた研究の推進に取り組まれています。海洋研究開発機構の研究グループをはじめとする若手研究者らをリードして行っているこの先進的な研究は、温暖化予測のための数値予報モデル（地球システムモデル）の改善に重要な役割を果たす可能性があるとともに、熱帯の気象を直接モデルで扱うことにより日常の天気予報や季節予報に用いる数値予報モデルの予測精度の改善にも資する可能性があると考えられます。

一方、松野会員は、気象、気候研究に関する多くの国際活動にも積極的に参加され、貢献されてきました。例えば、IPCC 第4次評価報告書第1作業部会における査読編集及び政策決定者向け要約の作成や、統合報告書の作成に対する活動などが挙げられます。また、世界気候研究計画（WCRP）の科学委員会委員（1986～1994年）や、「気候研究のための世界モデリングサミット（2008年）」の組織委員会委員なども務められました。

因みに、松野会員は、その類い希なる研究業績と研究活動の推進への貢献により、1970年に日本気象学会賞、1992年に日本気象学会藤原賞、1997年に日本学士院賞、1999年に米国気象学会ロスビー研究メダルを受賞するとともに、日本学士院会員、米国気象学会名誉会員に選出されています。

ここに、今回の松野会員の受賞についてご報告申し上げるとともに、心からお祝い申し上げます。

（気象庁国際室 長谷川直之）